教育学部論集　第14号（2003年3月）

地域の特性を生かした生涯学習コミュニティの構築に関する研究

――青少年の意識と行動に注目して――

原　　清治

〔抄　録〕

今日，青少年をとりまく社会環境は大きく変化している。それにともない，青少年の意識と価値観，社会規範なども多様化してきているといわれる。そうしたなかで，近年，地域に根ざした若者の文化を見直そうという動きが，次第に注目を集めるようになってきている。

これまでにも，地域と教育の結びつきについて論じた研究は多いが，そのほとんどが，近代化や都市化といった視点からのものであった。本研究は，少なくとも，そうしたフレームをあてはめにくい地域を調査研究の対象地として選定し，地域と教育研究における新たな分析枠組みを提示することを目的とした。そのための方法論として，フィールドワークの技法を用いてアプローチを試みた。

結果として，今回の調査地域では，青少年に限らず，それぞれの年齢層のもつ「文化」に合わせて「連帯意識」を形成しやすい傾向にあることが伺えた。しかも，それぞれの意識がぶつかり合うことなく，地元の伝統文化をよりどころとして地域がまとまっていたのである。その理由として，この地域では，幼い時から伝統芸能の伝承活動があり，そのため，地域の青少年の意識と行動も，地元文化と密接な関係をもっていたのである。さらに，数量化Ⅲ類による結果によれば，世代間の意識差に注目した場合，都市化が進んでも変わらなかった部分に焦点をあてることによって，こうした特殊な地域においては，「伝統の保守」という新たな分析フレームを提示することができるのではないか，という結論を得た。

キーワード：地域と教育，連帯意識，生涯学習コミュニティ，若者文化，フィールドワーク

1．はじめに

今日の青少年をとりまく社会状況は，さまざまな問題点をかかえており，青少年の意識と価値観も大きく変化してきている。そうしたなかで，地域に根ざした若者の文化を見直そうという動きが注目を集めるようになってきている。

そこで今回の調査では，第19回世界遺産委員会[(1)]において，文化遺産として，世界遺産リストに登録された「白川郷・五箇山の合掌造り集落」における青少年の意識と行動に焦点をあててみた。調査対象地域は，富山県東礪波郡平村相倉の集落である[(2)]。

この地域は，険しい山岳地帯に位置し，日本有数の豪雪地帯であるため，1950年代まで他地域との交渉が極めて限定的なものであった。つまり，隔絶山村として長らく独立性・閉鎖性を保ってきたために，現在でもこの地域に独特の生活習慣が残っており，その代表的なものが「結（ゆい）」と呼ばれるような地域の連帯形式である[(3)]。

この地域では，「こきりこぶし[(4)]」に代表されるような，民謡伝統文化の伝承が盛んであり，それを今日では生涯学習という観点から，次の世代へ伝承しようという動きが見られるようになってきた。また，世界遺産に登録される前後から徐々に観光地化が進み，年間100万人を超える観光客が訪れていることも，地域住民の生活へ影響を与え始めている。

このようなコミュニティのなかで，地域住民は生活実態にどのような変化を感じているのだろうか。また，五箇山を生涯学習コミュニティとしてとらえた場合，観光地化が進む地域の現状や，世界遺産の保存伝承という重責などを，とりわけ青少年はどのように理解しているのだろうか。

これらを問題意識として，現地でのフィールドワーク（主として，聞き取り調査）を実施し，青少年の意識と行動を実証的に考察したいと思う。

2．これまでの地域と教育研究の分析枠組みと本研究への演繹

地域と教育の結びつきに関する先行研究は，アメリカのオルセン（Olsen, 1945）によるものが大きな影響をもつといわれる[(5)]。それまでにも，こうした地域と教育の問題が議論されなかったわけではないが，それらは多く，貧困地域における就学の問題や，ニューカマーの都市部の参入問題などが中心であった[(6)]。こうした研究から，さまざまな知見は得られたものの，必ずしも，教育が地域との関係によって変化していることが明らかになったわけではない。すなわち，教育や学校が地域変化によって人口的に形を変えることはあったとしても，それが，青少年の文化や行動にまで影響を与えたかどうかまでは明らかにされていない。

また，アメリカのコミュニティ研究などに注目してみれば，1960年代に大きな論争があっ

た。それは，マッキーバー（MacIver, 1965）などによって提起された共同体研究が中心となるが，これらの研究の多くも，前提としては大きな社会変動，とくに地域の人口変動を前提としたものである。[7] この論争においても問題とされたのは，人口変化のような要因が，地域社会を変化させる上において「実体概念」なのか，あるいは「操作概念」なのかといった点であり，教育を含めたコミュニティの変化そのものには注目するものの，そこに居住する人々の意識レベルにまでその分析枠組みを広げてはいない。

本研究は，こうした地域変化をとらえる際に，「地域文化（伝統文化）の継承」という変数に注目する。これは，先行研究においてもあまり注目されてこなかった視点であり，どちらかといえば地域変化に抑制をかける要因ともいえる。さらに，調査対象地も人口の流動性の高い地域ではなく，移動がほとんど行われない過疎地域に焦点をあてることによって，生活の場としての地域文化がどのように変動するのか，もしくは変動しないのかを分析することが可能となるのである。

翻って，文化と教育の研究は，教育社会学の領域から教育のもつ本質的な機能を論じる場合，二つの概念を用いる場合が多い。ひとつは「文化の伝達」であり，もうひとつは「文化の内面化」である。文化はこうした「伝達」や「内面化」といった形で教育と関連する。[8] そのためには，まず，文化とは何かを整理した上で，地域文化と教育の関係を論じなければならない。

3.「地域」特性と「文化」をめぐる議論

アメリカの文化人類学者クラックホーン（Kluckhohn, 1960）は，文化を「後天的・歴史的に形成された外面的および内面的な生活様式（デザイン）の体系的なものである」と定義し，それは「集団の全員または特定のメンバーにより共有されうるものである」とその特徴を述べている。[9] 彼によれば，「文化」は，生活様式として集団の生活欲求を充足させるとともに，集団を統合する機能を有するところに特徴を見いだしており，その「文化」を共有することが，地域や社会を存続維持させるための条件となるのである。この指摘は，本研究のもっとも中心となる理論的基盤である。

（1）文化と社会規範

一般に，文化によって形成されたものを慣習と呼び，社会的規範をともなうものを因習と呼ぶ場合がある。この場合，社会規範は，その社会を構成する人々の行動や志向を規制する基準のことである。成員はこれに従うことによって，その社会における関係性がスムーズにおこなえるようになる。さらに，どのような地域や社会であれ，社会規範はその社会を成立させるうえで，必要最低限のルールといえる。

また，社会規範は，その地域を維持し存続させるという価値を共有する人々の間では，伝承されるが，新規参入者や新しい世代が流入する場合は，一定の強制力をともなうか，あるいは，その規範が崩落することを意味する。[10]

（2）コミュニティの定義をめぐって

アメリカの社会学者マッキーバーは，「コミュニティとは，ある程度の社会的結合をもつ，社会生活の一定の範囲」と定義している。それは，地域性とそこに所属する人々の「コミュニティ・センチメント（地域社会感情）」[11]によって成立するものである。この二つの原理によって，社会的結合がおこなわれるとき，地域社会が形成される。

1960年代から盛んに議論されてきた都市化の振興に，この概念を演繹した場合，例えば，社会変動は，この地域性や地域社会感情がそれまでの伝統的な社会に比べて大きく変化するという点を指摘するものが多い。

（3）新たなフレームの可能性

こうして考えてくると，ここで新たなフレームをつくるための視点を提示することができる。すなわち，近代化のプロセスで用いられる規範の構成と，地域社会を維持存続させるためのそれとは，かならずしも同一の次元では語れないのではないか。言い換えれば，流動化や社会変動の激しい地域に比べ，文化が周辺地域から隔離され，人口の流入が起こらない過疎地域においては，近代化のプロセスとは異なる，緩やかな社会変化が想定される。その場合，前者と後者は異なるパラダイムの上に乗せなければならない。したがって，本研究は，後者の地点からの新たな分析のフレームを構築することが目的となるのである。

4．研究の仮説と調査の概要

本研究の仮説は「世界遺産に登録される前後からの観光地化と，伝統芸能の伝承活動が地元の生涯学習コミュニティにおける青少年の意識と行動に影響を与えている」とし，現地でのフィールドワークを通してデータを収集した。

調査時期は，2002年9月7日（木）から9日（土）の3日間であり，富山県東礪波郡平村相倉を中心とした五箇山地域に居住している中学生，高校生および一般の住民を対象としてインタビュー調査を実施した。

5．事例をもとにした分析と考察

（1）事例の分析

以下では，今回の調査のなかから，中学生と高校生，地元青年へのインタビュー内容を中心に3つの事例を紹介していく。それぞれに，地元の中学校，高校へ通学する学生および地元出身で地場産業に従事する青年であり，取り上げた事例はいずれもそのなかから抜粋した，この地域の典型的な青少年の意識を代弁したものであるといえる。いずれも，「世界遺産についてどう思うか」を中心に，地域へのアイデンティティや，将来への希望，自分自身の将来の進路や夢などについて面接した。

（i）事例1【地元の中学2年生（女子5名）】

〈世界遺産について質問1〉

問：合掌造りの家を見てどのように思いますか。
　2人：「別に思わない。①」
問：観光客は多いですか。
　2人：「はい。」
問：観光客が多いことについてどのように思いますか。
　女子②：「う～ん（笑）嬉しい。」
問：それはどうしてですか。
　2人：「えっ，見てってもらえるから。②」
問：迷惑と思うことはありませんか。
　女子①：「でも最近はあんまりないよね，渋滞。」
　女子②：「うん。」
　女子①：「秋とかなら紅葉とかで。」
問：1995年に世界遺産の指定を受けましたが，それから何か変わりましたか。
　女子①：「車が増えた。」
　女子②：「秋とか…，観光客とか。」
問：世界遺産の指定を受けたことについてどう思いますか。
　女子①：「うーん。」
　女子②：「うーん。」
問：特に何も思いませんか。
　2人：「うん。③」
問：今まで合掌造りの家などについて調べたことはありますか。
　2人：「ない。」
問：他地域の世界遺産についてはどう思いますか。
　女子②：「別に。」
　女子①：「どうでもいい。④」（笑）

下線①，③，④のように，中学生の眼からは，伝統ある合掌造り住宅への興味や関心，加えて世界遺産に指定されたことについての特別な意識はないようである。ただ，下線②から

わかるように，地元の世界遺産や重要文化財を見に来る観光客に対しては，好意的な感情を示している。

〈進路についての質問〉

問：地域内に平高校がありますが，そこにどれくらいの生徒が進学しますか。
　女子②：「どれくらい…。3分の2くらい。」
問：他地域に進学する生徒もいるんですね。
　女子①：「うん，いっぱい。⑤」
問：それは私立の学校が多いのですか。
　女子①：「町にも公立がある。」
問：進学するなら近い高校か，他地域の高校かどちらがいいですか。
　女子①：「近く。」
　女子②：「遠く。」
問：遠くに行きたいのはなぜですか。
　女子②：「なんか，違う生活もしてみたい。⑥」
問：将来は進学や就職でこの地域を出るつもりですか。
　女子②：「うん，出たい。どっちでもいい。」
　女子①：「高校は近くでもいいけど，大学は遠く。」
問：将来就職などで他地域に出たとしても，また，戻ってきたいと思いますか。
　女子①：「そこまでは考えたことはない。」
　女子②：「うん。」
問：他地域への興味はありますか。
　女子②：「うん。」
問：それはテレビや雑誌などでそう思うのですか。
　女子①：「うん。いいなぁーって。買い物とか。」
問：やはりお店は少ないですか。
　女子①：「うん。山越えないと。」
問：お父さんやお母さんは地元出身ですか。
　女子①：「お母さんは違う町から来た人。」
　女子②：「私（の両親）はずっとここの村の人。」
問：地元の高校へ進学したいですか。
　女子④：「向こうがいい。」
　女子③：「向こうがいいけど～，頭が…成績が。」
問：もし，どちらでも選べるとしたらどうですか。
　女子③：「絶対，町の方がいい。」
　女子④：「平は地元やし，すぐ入れる。」
問：もし，大学への進学や就職をするとしたら，他地域へ行くことを希望しますか。
　女子③：「絶対行きたい。⑦」
　女子④：「え～，絶対ではないけどできれば行きたい。⑧」
　女子③：「え～，絶対行きたい。」
　女子④：「強い意志はないけど，できれば行きたい。」

下線⑤から，高校へ進学する際に，地元から離れ他地域に進学する生徒も少なくないことがわかる。また，下線⑥，⑦，⑧から他地域での生活に憧れる中学生の姿がうかがえる。

〈世界遺産について質問2〉

問：観光客が多いと聞きましたが，それについてどう思いますか。
　女子④：「ここら辺，あんまり来んしねぇ。」
　女子③：「相倉だけやし。別にあんまり害ないよねえ。車が通るくらい。そんなにあんまり変わらん，世界遺産になっても車が増えたかなぁぐらいで。⑨」
問：以前に比べて車が増えましたか。
　女子③：「休みの日とか，ゴールデンウィークとか大変。」
問：合掌造りの家に住んでいる人はいますか。
　三人：「いなーい。」
　女子⑤：「っていうかあんまり合掌造りに住んでる人いない。」
問：ほとんどいないのですか。
　女子③：「平中学で住んでる人1人か2人くらい。」
　女子⑤：「しかも民宿やから，住んでるっていうか。」
問：合掌造りの家について，何か思いますか。
　三人：「ないよねぇー。」
問：特に何も思いませんか。
　女子③：「っていうか，何でこんなんが世界遺産？　みたいな。⑩」（笑）
　女子⑤：「ピラミッドとレベルが同じなんがなんか情けない。」（笑）
　女子⑥：「納得できんねぇ。」
問：誇りに思いませんか。
　女子④：「うん。なんかー，可哀想とか思う。⑪」
問：若い世代の人が継いでいくことになっているのではないですか。
　女子③：「表面上は継ぐって言ってるけど，内面は何にも思ってないよねぇ。」
　女子⑤：「世界遺産になったら壊せなくなったりするから逆に可哀想とか思う。新しい家に出来んから。」
問：残していこうとはあまり思いませんか。
　女子③：「残ってったらいいなぁ，みたいな。」
　女子⑤：「世界遺産になったから普通に残っていくなぁーみたいな。」
　女子③：「自分達は何もしない。⑫」
　女子④：「特別な想いはない。⑬」
　女子③：「あっちの人はあっちでやっといてみたいな。⑭」（笑）

下線⑨，⑩から彼女たちが世界遺産に指定されたことについて，非常に冷静に受け取っていることがわかる。また，指定されている地域だけのことであり，自分たちには関係の薄いことだと認識している。とくに下線⑪～⑭からもわかるように，世界遺産に指定された地域とそれ以外の地域という思いが非常に強く，指定地域の問題点については同情するが，あくまで他人事であるといった感情をもつ傾向がある。

面接をした中学生のなかには，特に世界遺産指定に関して強い興味や関心を示す生徒はいなかった。その理由としては，生まれた時から合掌造りの住宅が身近にあったために，当たり前のものとして受け取っていることがあげられる。また，あまりにも身近な存在のために，合掌

造り集落の今後のことに関しても，とくに何らかの活動を自分たちからするという意識はなかった。その反面，幼い頃から保存への金銭的な苦労などを知らされているためか，世界遺産指定や重要文化財指定を受けている地域への同情的な感情は表出されていた。

将来についての質問には，できれば地元を離れたいとの回答が多く聞かれた。理由としては，他地域への憧れと，地元での買い物の不便さ，交通の不便さをあげる傾向が強くみられた。しかし，地元が嫌いであるといった意見は聞かなかった。つまり，地元を離れたいという希望は，地元への不満からきているのではなく，他地域への憧れからきているといえるだろう。

（ii）事例２【地元の高校生（２年女子３名，２年男子１名，１年男子１名）】

〈世界遺産についての質問１〉

問：五箇山地域が世界遺産に登録されたのはいつか知っていますか。

女子③：「えっと，97年位だっけ？　あれ？　もっと前だっけ？　96？？」

問：登録されたのは，1995年です。

女子③：「おいおい。」（恥ずかしいという感じの表情）

問：あまり注意をしていなかったのですね。

（高校生３人とも少し苦笑い）

問：世界遺産に指定されてから，どのように生活が変わりましたか。

女子①：「え～変に，なんて言うか，手入れ過ぎて，自然がー。」

女子②：「キレイにし過ぎ。」

女子①：「そう，キレイにし過ぎて逆におかしい。」（少し顔をいがめて）

問：では，良い変化はありませんか。

全員：「いや…。」（そんなこと無いといった感じで苦笑い）

問：世界遺産に指定されて嬉しく思いますか。

女子③：「あっ，そういうのは意見別れる。やっぱり良いと思ういう人と，そう変わらんやろという人と，あんまりなっても良くないと言う人も中にはいる。⑮　意見は別れるけど私は良いと思う。」

女子①：「住んどる者にしてみれば…。」

女子③：「嫌だね？」

女子①：「嫌…かな。」

女子②：「観光客の人が，家の中をのぞく人とか。」

女子③：「私，バイトしてたんですけど，そこで，近くで。いろんな人が来るからおもしろいけど，住んどる人にとっては，ね？　やっぱりいろいろ意見がある。」

女子②：「（観光客が）多くて，店としては良いけど，やっぱし住んどる人からすれば，あんまし，なんか知らん，なんて言うか，全く知らん人とかが，ぞろぞろぞろぞろ来て。」

問：他地域と比較して，自分たちが住んでいる地域は随分違うと思いますか。

女子③：「ありまくりやね。」（笑）

問：例えばどういうところですか。

女子③：「あー店とかは多いし，一番違うのが店，ここだと買う物が全然無くって。⑯」

問：他地域のどういうところが好きですか。

女子③：「雰囲気。」

問：お店が多いところもですか。

女子③：「あるし，イイ感じ。」
問：将来は，この地域から出たいと思いますか。
女子③：「やっぱりここが好きだからなんか住みたいけど。」
女子②：「ずっと暮らすのが嫌だけど，帰ってきたいとは思う。⑰」
女子③：「確かに町に行って疲れるんですよ。んで帰ってくると安らげるって感じやから，ここがあって町って楽しいのかなって。⑱」
問：世界遺産に指定されてから，特に注意していることはありますか。
女子③：「私は無い。」（笑）
女子②：「洗濯物（笑）外で乾かしにくいものとか。観光客の人に見られたり見えたりするから。自分が嫌だから。」
問：観光客にしてもらいたくないことはどういうことですか。
女子③：「うーん，初めてあったのは酒飲んでよっとってからんでくるような感じ。んで，タバコとかも注意してもよっとるから聞かん。」
女子①：「やっぱり家の中とかは人が住んでるわけやから見て欲しくは無い。」
女子③：「確かにそれはあるよね。」
問：その他にも何かありますか。
女子③：「なかなか良い客もおるときはあるからね。よくわからん。」
問：良い客とはどのような客ですか。
女子③：「なんか興味があってちゃんと見に来てる人は，色んな質問とかして来たりする。⑲」
問：将来は，地元で合掌造りを守っていきたいと思いますか。
女子①：「えー，守っていきたいと言うか，おっといて欲しい。けど自分ではどうにもできんし。」
女子③：「やっぱ，世界遺産は残っといて欲しいけど，時代によっては思ってもできんかも知れん。」
問：それは皆さんの両親の姿を見てですか。
女子②：「だからかな。」

下線⑮から，世界遺産指定については賛否両論があることがわかる。特に，女子①と女子②は両親が相倉地域で民宿を営んでいるために，質問に対しても複雑な心情を表していた。下線⑯では，買物をするときは他地域まで出ないと，高校生が求めるものが手に入らないということがわかる。そのため，他地域への憧れは非常に強いといえる。しかし，下線⑰，⑱からわかるように，決して地元を嫌っているわけではないことがわかる。それどころか，地元での素朴な生活があるからこそ，いわゆる都会へ出る楽しみもあるのだということを彼女たちは認識している。また，例え将来地元を離れたとしても，いつかは戻ることを希望していることがうかがえる。下線⑲からは，地元への興味・関心が強い観光客ほど歓迎していることがわかる。

〈世界遺産についての質問2〉

問：昨日，民謡と踊りを披露してくれたのは，2年生のみなさんですか。
2年生男子：「そうですけど，ここ全部平高校生は，あっ半数か，やっとるがですけど，1年生男子もやっとるがですけど，昨日のは相倉保存会というちゃんとした保存会があってその中から一応相倉の子やったから出とって…。⑳」
問：昨日，披露してくださった踊りを，子どもに伝えていきたいと思いますか。
2年生男子：「あっ，やっぱそれは子供達が見て覚えていくから，教える必要は無いかな。㉑」

問：世界遺産に指定されてから意識は変わりましたか？　建物や地域に関して配慮している事などありますか。

2年生男子：「配慮している事ですよね，ほとんど変わってないかなー，唯一，前よりタバコとか，あと草とか花とか取ったらあかんというが，厳しくなったかな。そこらへんゴミ落ちてたら捨てたりとか気使うくらいで昔とそんなに代わってない。」

問：観光客についてはどう思いますか。困ることなどありますか。

2年生男子：「それはもちろん。」

問：具体的にはどういうことですか。

2年生男子：「うーん，観光客増えて夜でも勝手に入って来たり見にきたりとか，写真写しに来たり…。」

問：家の中までですか。

2年生男子：「いや，車で中に入ってきて駐車場以上に中に入って来たりとか，たまに家の見学させて下さいって何人もの人がダーッて入って来たり，やっぱゴミ捨ててったり。㉒」

問：そのようなことは気をつけてほしいですか。

2人：「うん。」（口々に）

1年生男子：「観光客いきなりガーッときたけど，でも減ってない？」（2年生男子に聞く）

2年生男子：「減ってきてるか…。そっか，一時期だけダーッてきたけど。」

問：世界遺産指定前と現在の観光客では違いがありますか。

1年生男子：「んー，若い人が来るようになったとか…。」

2年生男子：「っていうか，世界遺産になる前は重要文化財になってて，そん時も見にこんかったわけじゃないな。けっこう来とって，だからそんな世界遺産になってからも，なってようやく来た人もおるし，前からずーっと見に来とった人もおるし…常連客多い。泊まりに来てて，また次の年にも来る人とか。」

問：世界遺産に指定されてから自分たちの生活の中で変わった事はありますか。

1年生男子：「あったことはあったかなー。」（高校生2人はお互いに顔を見合わせながら。）

2年生男子：「人が，ダーッてくるから，出難いかな。」

問：外にですか。

2年生男子：「外に。前まで（観光客が）少なかったから外で遊ぶ事も出来たけど。㉓」

問：気を使うのですね。

2年生男子：「そう，気を使って。それくらいかな。」

問：世界遺産に指定される前と今とでは何か変わりましたか。

2年生男子：「そう，やねー。道路がきちんと整備されたくらいかな。高速できたり。色々されるみたいやけど。」

問：それについてはどう思いますか。

1年生男子：「僕は嬉しい。」

2年生男子：「嬉しいか？」（ビックリした様子で。）

1年生男子：「僕あの，変なトラック走るのがうるさいから，高速できたらうるさくないから。」

2年生男子：「だからあれ，山とか壊されとっから…。」

問：自然破壊をされたくないということですか。

2年生男子：「まあ，そうやね。」

問：地元地域に対して誇りをもっていますか。

2年生男子：「おぉ，けっこう思っとるかな。㉔」

問：世界遺産指定のことや，村の将来のことについて世代を越えて話し合いなどはしますか。

2年生男子：「大人同士ではあると思うけど。その会合って月に1回か知らんけど村同士で会合っちゅう集会みたいのを開いて村の相談したりするみたい。子供はまだ手付けとらんけ

ど。」

問：おじいさんやおばあさんの世代，お父さんやお母さんの世代，皆さん方の世代とで考え方が違うと思いますか。

2年生男子：「んー，親が一番考えとると思う。㉕　ばあちゃん達はそんな話あんまりないね。世間話か田んぼの仕事してるくらい。」

問：友人同士で自分たちの村について話をしますか。

2年生男子：「たまにアンケートで，大学からのとかいって紙だけ配られたりとか。」

1年生男子：「僕，そこにコンビニが欲しいって書いた。」

〈進路についての質問〉

問：地元を離れる人は多いですか。

2年生男子：「あーそうやね，就職の時とか…。でもほとんど平やね。平の人達も，平の土木とか，土木に行く人もおれば，まやっぱ富山県内が多いと思う。そんな，都会行く人はあんまり。」

問：将来も，地元に残りたいですか。

2年生男子：「あー，出ていきたい人もおるし，やっぱ好きで残る人もおると思うし。」

1年生男子：「僕は残って…。って出ていくとは思うけどまた戻っていきたいと思います。㉖」

2年生男子：「（僕も）ですね。㉗」

〈他地域と地元との比較〉

問：県外に遊びに出ることはありますか。

2年生男子：「あーあるあるあるある。そりゃ，この民謡，高校の郷土芸能やっとたら，それで静岡とか，今年は静岡で，そのうちの4高が全国大会に選ばれて東京まで行ってきたし，去年は山形行ってきたし，けっこういろんなとこ行ってる。」

問：どのように感じましたか。

2年生男子：「あー，ビルでかいなってくらい。」

1年生男子：「僕は，暑いなって思った。空気汚いなって。」

問：あまり良いイメージはありませんでしたか。

2年生男子：「あんましよくない，…そうやね。」

1年生男子：「ここに帰ってくると，トンネル来たら帰ってきたなって感じする。」

問：ここが一番だと思いますか。

2人：「思うね。㉘」（口々に）

問：本当に良い所ですね。

2年生男子：「（照れて）良くないよ。だってここは平和過ぎるし，あと夏暑すぎるし，冬寒いし。」（2人で笑）

1年生男子：「もう1ヶ月もしたらすぐ寒くなる。」

2年生男子：「まあ，また冬に来て見て。」

問：やはり冬は嫌ですか。

2年生男子：「大変さを知ったらわかるわ。」（笑いながら）

下線⑳から，伝統芸能の継承には保存会が大きな役割を担っていることがわかる。また，下線㉑から，普段からごく自然に伝統芸能と触れ合っていることがうかがえ，その継承活動もあたり前のこととして受け取っていることがわかる。

下線㉒，㉓からは，観光客のマナーの悪さに困る地元の生活や，しかしながら，観光客を迎えるために皆が気を使っている姿がうかがえる。

下線㉔からは，地元に対する誇りがうかがえる。そして，下線㉕，㉖，㉗からは合掌造り住宅の保存などに対しては親の世代がもっとも真剣に考えていることや，例え将来，地元を離れてもまた戻ってくる意思があることがわかる。それは下線㉘からもわかるように，地元への愛着が強いことが青少年の意識の根底にあるからである。

中学生と高校生を比較してみると，高校生になるにつれて地元への意識が高くなることがわかる。しかし，中学生と同様に世界遺産指定に対しての特別な感情は少ないといえる。その理由としては，世界遺産に指定される以前に，国から重要文化財の指定がされていることから，世界遺産指定での大きな変化が少なかったことがあげられよう。ただ，日常生活をしているなかで観光客のマナーの悪さが目に付くことや，観光客に対して気を使っていることがよくわかる。とくに，世界遺産指定地域で両親が民宿を営んでいる生徒にとっては，非常に大きな問題として受け取っている。同時に，合掌造りの継承などの問題については，直接自分たちとの関係は少ないとは考えているものの，親の世代がさまざまな苦労をしていることを感じているだけに，彼ら自身も悩んでいるといった微妙な心のゆらぎがわかる。

（iii）事例3【地元で働く男性（24）】

問：ずっとこちらにお住まいなんですか？

男性：「いいえ，僕は東京生まれで，12歳のときのこっちに来たんです。父がここの人間で，父にとってはUターンになりますね。」

問：世界遺産に指定されたことについてどう思われますか？

男性：「そりゃあ，嬉しいですよ。村民として誇りに思います。㉙」

問：合掌造りの保存についてはどう思われますか。

男性：「もちろん賛成です。この店も，もともとは合掌造りなんですよ。正面から見て右側は増築したんですけど，左側は合掌造りをそのまま持ってきて，屋根だけを変えたんです。やっぱり屋根の管理が一番大変なんで。そのままの形では保存しにくいので，一部を使ったりしてるんです。中の柱とかは，そのまま使ってるんですよ。何かを形にして残していきたいので，せめて柱だけでも，と思いまして。」

問：若い人たちはどのくらいが，地元を出てきますか。

男性：「高校のクラスの半分くらいは，出て行ってますね。」

問：その中で戻ってくる人，つまりUターンする人はどのくらいいますか。

男性：「少ないですよ。あんまり帰ってきませんね。」

問：こちらにきて不便だと思うことはありませんでしたか。

男性：「うーん，なかったらなかったで，慣れていきますよ。ないものとしてやっていけばいいことですし。結局，守るだけではだめなんですよ。自分で何とかしていかなければって気になりますよ。」

問：観光客についてはどう思われますか。

男性：「こうやって，深く追求してくれると嬉しいんですけどね。2時間程で帰られるのではなく，

一泊でもして，ここの本当の良さを理解してほしいです。㉚」

下線㉙，㉚から世界遺産指定に対する喜びと，地元地域に対する誇り，そして，より多くの人々に地元を理解して欲しいという意識を持っていることがわかる。高校卒業後，地元を離れる人が多いなかで，地元に戻り伝統を継承していくことに情熱を注ぐ人物もいることがわかる。

（2）中学生，高校生へのインタビューの結果より

インタビュー調査から，中学生については，伝統ある合掌造り住宅への興味や関心，加えて世界遺産に指定されたことについての特別な意識はないようである。ただ，地元の世界遺産や重要文化財[12]を見に来る観光客に対しては，好意的な感情を示している。

面接をした中学生のなかには，特に世界遺産に関して強い興味や関心を示す生徒はいなかった。その理由としては，生まれた時から合掌造りの住宅が身近にあったために，当たり前のものとして受け取っていることがあげられる。そのため，合掌造り集落の今後のことに関しても，特に何かの活動を自分たちからする，という意識はなかった。その反面，幼い頃から合掌造り住宅の保存に関して，金銭的な苦労などを親などから知らされているためか，世界遺産指定や重要文化財指定を受けている地域への同情的な感情をもっていた。

将来についての質問には，できれば地元を離れたいとの回答が多く得られた。理由としては，他地域への憧れと，地元での買い物の不便さ，交通の不便さをあげることが多かった。しかし，地元が嫌いであるといった意見は聞かなかった。つまり，地元を離れたいという希望は，地元への不満からきているのではなく，新鮮味があふれる他地域への憧れからきているといえるだろう。

次に高校生については，世界遺産指定については賛否両論があることがわかった。また，買い物をするときは，他地域まで出ないと高校生が求めるものが手に入らないということなど，地元地域に対して不便さを感じていることも伺えた。そのため，他地域への憧れは非常に強く表れていた。しかし，決して地元に対して嫌悪感を持っているわけではなく，地元での素朴な生活があるからこそ，都会へ出る楽しみもあるのだということを高校生は認識していた。この点については，中学生と共通の意見だといえる。また将来，進学や就職で地元を離れたとしても，いつかはこの土地に戻ってくることを希望している高校生が多いことがわかった。その理由としては，伝統芸能に対する情熱や，自然環境の素晴らしさをあげる傾向があった。

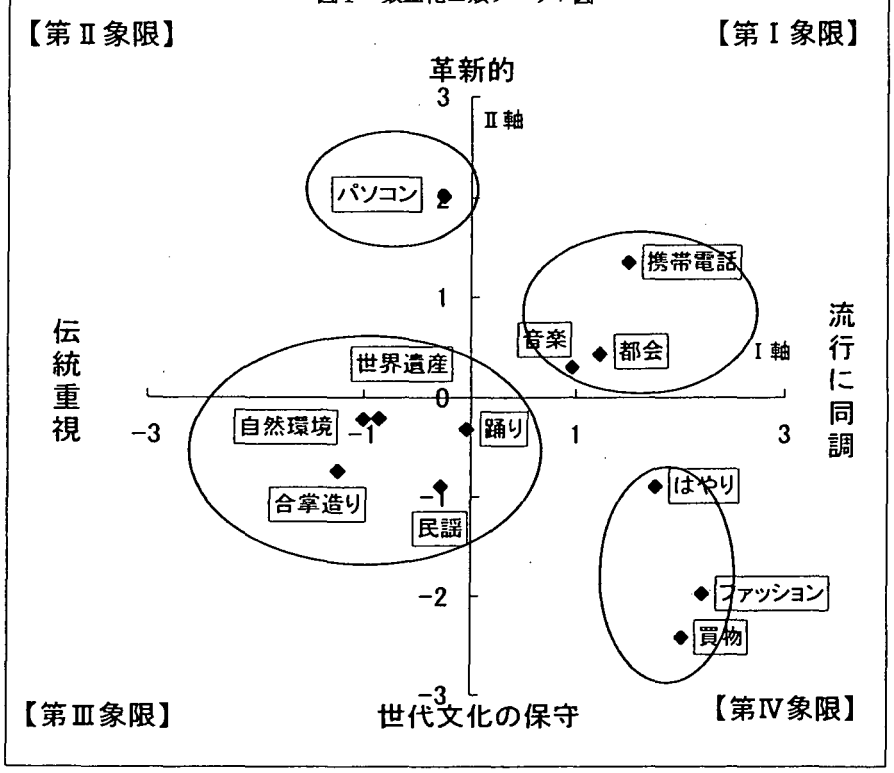
このような中学生と高校生を比較してみると，高校生になるにつれて地元への意識が高くなることがわかる。しかし，高校生も中学生と同様に世界遺産指定に対して，特別な感情をもっていなかった。その理由としては，世界遺産に指定される以前に，国からの重要文化財の指定がされていることから，世界遺産指定での大きな変化が少なかったとことがあげられる。ただ，

彼らは地元地域を訪れる観光客に対しては，様々な思いを抱いていた。それは，地元地域の理解を深めてもらいたいという気持ちや，観光客がすごしやすいように気をくばるといったものだった。その反面，観光客のマナーの悪さが目に付くことを問題点としてあげていた。特に，世界遺産指定地域で両親が民宿を営んでいる生徒にとっては，非常に大きな問題として受け取っている。同時に，合掌造りの継承などの問題については，直接自分たちのとの関係は少ないとは考えているものの，親の世代がさまざまな苦労をしていることを感じているだけに，彼ら自身も悩んでいるといった微妙な心のゆらぎがわかった。また，実際に他地域からのUターンをした人は，世界遺産指定に対する喜びと，地元地域に対する誇り，そして，より多くの人々に地元を理解して欲しいという意識を強く持っていることがわかった。このように高校卒業後地元を離れる人が多いなかで，実際に地元に戻り，伝統芸能などを敬称していくことに情熱を注ぐ人の存在が，今後の地域発展の鍵を握っているように思える。

6．青少年の意識と行動 ――数量化Ⅲ類による分析――

以上のように，地元の青少年の意識と行動について，インタビュー調査から考察してきた。

図1　数量化Ⅲ類プロット図



では，総じて，コミュニティの青少年たちの意識や行動は，どのような特徴があるのだろうか。そこで，インタビュー調査の質的なデータを，量的なデータに変換し，全体を概観しやすいように，視覚的に捉えることが容易なパターン分類モデルとして数量化Ⅲ類による分析をおこなった。その結果が図1である。

まず，数量化Ⅲ類で青少年の意識をあらわす12のアイテムを分析し，図1のプロット図を作成した。

結果から，第Ⅰ象限は流行に同調・革新的，第Ⅱ象限は伝統重視・革新的，第Ⅲ象限は伝統重視・世代文化の保守，第Ⅳ象限は流行に同調・世代文化の保守という特徴をもつことがわかった。このプロット図を元にして，性別・年齢・職業の3つの属性がどのような特徴を持つかを分析したところ，図2から性別については，男性が第Ⅱ象限に，女性が第Ⅳ象限に位置することがわかる。つまり，男性は伝統重視・革新的であり，女性は流行に同調・世代文化の保守という傾向をもつといえる。

次に，図3から年齢についてみると，19歳以下が第Ⅰ象限で流行に同調・革新的，20～39歳が第Ⅱ象限で伝統重視・革新的，40歳以上が第Ⅲ象限で伝統重視・世代文化の保守という傾向をもつことが伺えた。このように年齢を重ねるごとに意識の傾向が推移していくことがわかった。これには，壮年層以上になると世界遺産を次の世代に受け継いでいかなければならな

図2　性別による分析

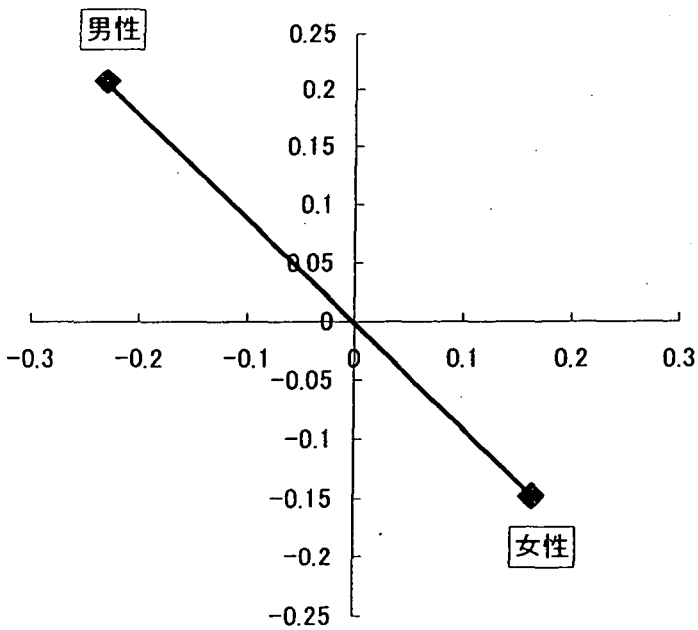


図3　年齢による分析

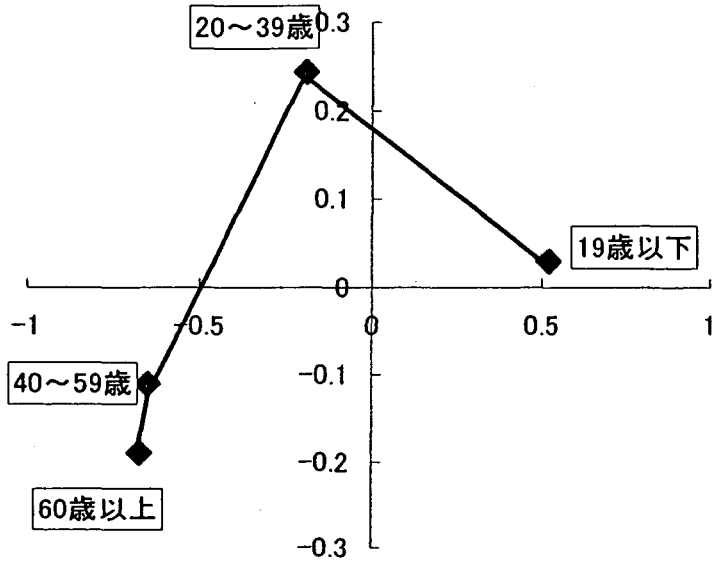
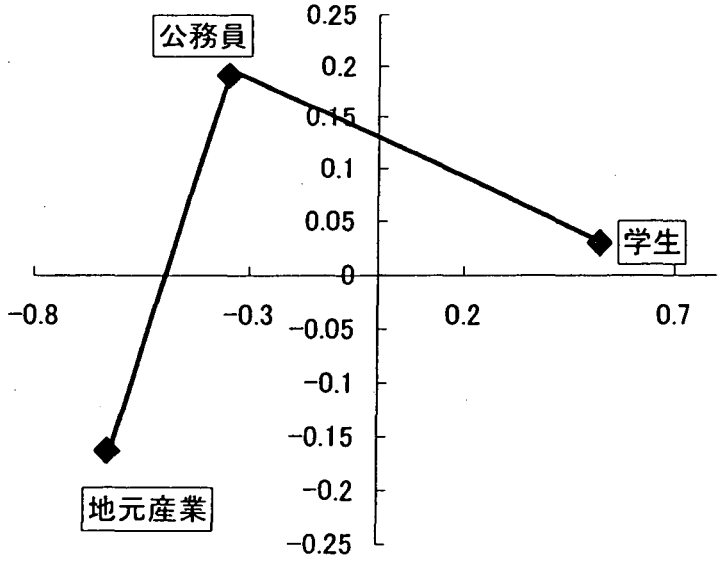


図4　職業による分析



いことを，実感せざるを得ない状況が影響しているといえるだろう。

そして，図4から職業についてみると，学生は第Ⅰ象限で流行に同調・革新的，公務員は第Ⅱ象限で伝統重視・革新的，地元産業は第Ⅲ象限で伝統重視・世代文化の保守の傾向があることがわかった。インタビュー調査からも，特に公務員である村役場の職員は，地元地域の伝統文化を尊重し，それらを紹介するホームページの作成に力を入れていたことや，観光業を中心とした地元産業は，伝統芸能や合掌造り住宅を保守し伝承していくことに力を入れていたことが伺えた。

7．結　　論

これまでにも述べてきたように，今回の研究の主たる目的は，山村にある過疎地を事例として取り上げ，生涯コミュニティを考える上で，都市化や近代化などの分析に用いられる既存の分析枠組みでは語れないような新たなフレームがあるのではないか，という点に示唆を与えるような基礎的データを提示することにあった。

インタビュー結果からは，「都市化によって変わった部分」と「都市化が進んでも変わらなかった部分」があることが明示され，その後者に，多変量解析を用いて焦点をあてた結果，「伝統文化の保守」という「近代化」とは異なる文脈でのコミュニティの展開を説明し得るフレームを提示することができた。

さらに，この五箇山地域の特徴として，今回の調査で感じた点をとりあげて，本稿のまとめに変えたい。

それは，五箇山という地域のもつ特殊性である。五箇山は，現在でこそ観光地化が進み，人々の出入りが盛んになってきたものの，かつては北陸の流刑地であり，周辺の地域とは地理的にも物理的にも孤立した地域であった。加えて，この地の特質としては，加賀藩が隠し持った硝煙作りの地としても有名で，それらの理由から，意図的に他の地域とは隔離された地域である。これが，この地域の精神性を説明するのに特殊な環境となっているのではないだろうか。

また，伝統芸能を脈々と世代間で伝承している地域であり，こきりこ節に代表されるような民謡を，若い世代も拒むこともなく受け継いでいる。一般に，文化を論じる場合，「内面的文化」と「外面的文化」の別を用いることがあるが[13]，これらは典型的な内面的文化である。インタビューにもあったように，例えば合掌造りの民家の保存といった外面的なことに対しては，若い世代は否定的である。もし，近代化や都市化といった文脈のみでこれを説明しようとすれば，民謡のような内面化された文化に対してのみ強いコミットメントをもつことが，明確に説明できない。

つまり，近代化では説明がつかないコミュニティの「変化しない」部分，「守る」部分（あるいは「好んで守る」部分），「伝承する部分」が，この地域には存在するのである。今回，飛

び込みで実際に民謡を躍る機会を得たが，踊ってみてわかったことは，しんどさを感じないことであった。それは，他の地域の伝統芸能や祭りなどにみられるような，活発で躍動的な動きではなく，こきりこ節や，といちんさ[14]，にしても，人間の躍動感や胎動，いきいきとした自己の内面の表現，一定の哀愁やペーソスをもったリズムがあるからだと思えた。こうした文化が，継承されて残ってきたのか，あるいは取捨選択されてきたのかを明らかにすることも，この地域をより明確に理解する助けとなろう。そのためには，文化人類学や民俗学の視点からのアプローチも必要である。

総じて，今回の調査地域では，それぞれの年齢層のもつ文化に合わせて意識を形成しやすい傾向にあることが伺えた。しかし，それぞれの意識がぶつかり合うことなく，地元の伝統文化をよりどころとして地域がまとまっていた。その理由には，よい悪いは別として，この地域では幼い時から伝統芸能の伝承活動や，合掌造り住宅の保守といったことを学びながら育ってきたことが考えられる。そのため，この地域の青少年の意識と行動も，地元文化と密接な関係をもっていたのである。こうした「伝統の保守」という分析フレームも，今後の生涯学習コミュニティを考えるうえでは，重要な要素のひとつとなり得るのではないかと思われる。

〔注〕

（1）世界中にある文化財や自然環境など未来に引き継ぐ重要なものをUNESCが指定する。世界遺産はすぐれた普遍的価値をもつ建築物や遺跡など（文化遺跡），すぐれた価値をもつ地形や生物，景観などを有する地域（自然遺産），文化と自然両方を兼ね備えているもの（複合遺産）の3つに分類されている。

（2）「白川郷・五箇山の合掌造り集落」は，荻町集落，相倉集落，菅沼集落の3つの集落からなっている。それぞれが文化財保護法第2条および第83条により「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されている。そのうち，相倉集落，菅沼集落においては1970年に同法第69条によって，国の「史跡」指定をうけている。また，「合掌造り」や「こきりぶし」をはじめとして，さまざまな伝統文化を継承しており，1995年には「世界遺産」に登録された地域である。

（3）「白川郷・五箇山の合掌造り集落」において古くから伝承されている地縁による相互扶助の慣習のことであり，「組」を基本としておこなわれてきた。主に冠婚葬祭や萱葺き屋根の葺き替え時などに有効的に機能した。

（4）こきりこぶしは，富山県東礪波郡平村に伝誦される祭り唄。中世の後半から近世にかけて台頭した，民族芸能の「田楽法師」や「放下僧」の所作及び地唄の一部が土着固有化した神事芸能。五箇山で使用される「ササラ」には「棒ザサラ」（摺籠）と「びんささら」がありこの「びんささら」は四苦三十六枚から八苦七十二枚そして毒苦五十四の倍数百八の煩悩を打ち払うとの伝説もある。いずれにしても日本民謡の中では最も古い歴史をもつ唄の一つといわれている。

（5）岡崎友典「改訂版　地域社会と教育＝地域教育社会学＝」放送大学出版協会，1996，p.46

（6）例えば，貧民地区の子ども達の学力保障や都市にニューカマーが流入することによる就労問題など。

（7）福武直・日高六郎・高橋徹編「社会学辞典」有斐閣，1958，p.860

（8）地域文化と教育の関係を全体社会の文化と部分文化の視点からみていくことで，地域文化の継承の教育的意味を導きだすことが必要である。
（9）岡崎友典，前掲書，p. 217
(10) 同上，pp. 217－218
(11) 福武直・日高六郎・高橋徹編，前掲書，p. 860
(12) 文化財を「有形文化財」「無形文化財」「民俗文化財」「記念物」及び「伝統的建造物群」と定義し，これらの文化財のうち，重要なものを重要文化財として国が指定選定し，重点的な保護の対象とする。
(13) 岡崎友典，前掲書，p. 216
(14) こきりこ節と同様に，この地方に伝誦される祭り唄のひとつ。

〔付記〕本稿は，平成14年度佛教大学特別研究助成を受けておこなった調査研究の成果の一部である。

（はら　きよはる　生涯学習学科）

2002年10月16日受理